

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：11301  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2011～2012  
 課題番号：23720021  
 研究課題名（和文） 『壇経』の再発見写本を中心とした六祖慧能関係資料の文献学的思想史的再検討  
 研究課題名（英文） A research on Liuzu Huineng(六祖慧能):Focusing on manuscripts of Tan-jing(壇経) and other documents  
 研究代表者  
 齋藤 智寛 (SAITO TOMOHIRO)  
 東北大学・大学院文学研究科・准教授  
 研究者番号：10400201

## 研究成果の概要（和文）：

後世の禅宗諸派で祖師と仰がれた六祖慧能の言行録『六祖壇経』と、その関連資料についての考察をおこなった。特に『壇経』に収録される詩歌に着目することで、本書の成立問題と、本書の「心」や「本性」に関する考え方を検討した。その結果、『壇経』の散文部分と詩歌の部分とがしばしば不整合であり編集の痕跡を残すこと、「鏡の臺」や「心地」などの比喻表現が同時代の禅僧とはややちがった『壇経』独自の心性論を反映していることが明らかになった。

## 研究成果の概要（英文）：

This study considered about the "Platform Sutra(六祖壇経)" and its related data of Liuzu Huineng(六祖慧能),especially by paying attention to poetry which recorded on "Platform Sutra",the view about the formation problem of this book, and the "heart(心)" and "Buddha nature(本性)" of this book was examined.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	3,500,000	1,050,000	4,550,000

## 研究分野：中国思想

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学印度哲学仏教学

キーワード：壇経、六祖慧能、祖堂集、敦煌文献

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 2009 年、中国遼寧省の旅順博物館において、かねて行方不明となっていた大谷探検隊将来の敦煌写本『六祖壇経』が再発見された。これは巻首と巻尾の写真のみが知られて現物が行方不明であったのを、旅順博物館の職員が同館書画倉庫より再発見したものであり、5 本目の敦煌本である。

これを受けて 2010 年 3 月 29 日には、龍谷大学で開催された「旅順博物館蔵仏教写本国際研討会」の席上、同館副館長・王振芬氏により「旅順博物館蔵《壇経》写本的“再発見”与学術価値探訪」と題する報告がおこなわれた。申請者は、さっそく報告論文を入手して一読したが、その結果、旅博本が校訂上有用

な善本であるばかりか、『壇経』の受容史にも手掛かりを提供する貴重な資料であり、敦煌本『壇経』の研究が新たな段階に入ったと確信した。

(2) 申請者はかつて、「六祖慧能大師与仰山慧寂」(『曹溪一禅研究』第二卷、中国社会科学出版社、400～415 頁、2003 年)において仰山慧寂(807-883)の引用する慧能の言葉を検討し、それが一般に予想される『壇経』ではなく『曹溪大師別伝』に由来することを確かめた。

「臺のない鏡—『六祖壇経』呈心偈考—」(『集刊東洋学』第 101 号、43～62 頁、2009 年)においては、従来曖昧に読まれてきた慧

能呈心偈を精密に読解し、「臺」は心、「鏡」は智慧を象徴することを論證した。また東北大学若手研究者萌芽研究育成プログラム「東北大学附属図書館蔵の拓本資料の基礎的研究」(平成21~22年度)において慧能関連の石刻拓本を調査整理するに及んで、慧能ゆかりの諸寺院の伽藍復興運動と『壇経』の開版とを関連づけて考える着想をも得た。

このように申請者は、かねてより『壇経』の思想と後世の受容について、成果を挙げ関心を成熟させており、これまでの個別研究を踏まえて、より全面的な研究を進めたいと念願していた。旅博本の再発見は、申請者の研究にとってもまさに時宜を得たものであり、ここに科研費による研究課題の申請を決意したのである。

## 2. 研究の目的

2009年に旅順博物館において再発見された大谷探検隊将来本『六祖壇経』(以下、旅博本『壇経』)を中心として、六祖慧能(638-713)関係資料の総合的な再検討をおこなう。

具体的な研究内容は、以下の二点である。

ア、『壇経』を中心とする、『曹溪大師別伝』『神会語録』など唐代における六祖慧能関連資料の文献と思想の両面にわたる再検討。

イ、敦煌文書に残された古逸仏教史書や『祖堂集』などの禅宗史書の研究を通して、『壇経』に見える禅宗史観や正統意識の性格を側面から明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1)『壇経』に見えるすべての偈頌について、前後の散文部分との連関、比喻表現と内容について検討する。その考察を通じて、『壇経』の成書問題を偈頌の収録という点から再考察し、また『壇経』に見える心性論を比喻表現に着目して明らかにする。

(2)敦煌文書スライム2546『妙法蓮華経玄贊鈔(擬)』を詳細に読解し、法相宗において真諦三蔵が禅宗の批判者として形象されていたことを明らかにする。真諦三蔵は『曹溪大師別伝』においては、制旨寺における慧能の説法を予言した人物として描かれており、法相宗という対立宗派の言説を通して、禅文献における正統意識のありようについての多角的理解を得る。

(3)唐代後期の禅僧である華亭徳誠、夾山善会、楽蒲元安師弟を取り上げ、禅宗史書『祖堂集』では三代の伝承がいかに記録されたかを考察する。特に、開悟という本来個人的な体験に属する仏法をいかに伝承するかという問題に着目することで、『壇経』に説かれ

る頓悟説や南北宗の別、神会派の位置づけ、あるいは西天二十八祖説といった問題と関連しつつ、より深化した形での言説の分析をこころみる。

## 4. 研究成果

(1)『壇経』の偈頌について

①「無臺明鏡照心地：《六祖壇経》的偈頌及其心性論」(鄭阿財編『仏教文献与文学』仏光文化事業有限公司、2011、pp.60-91)では、『壇経』に見えるすべての偈頌について、前後の散文部分との連関、比喻表現と内容について検討した。一連の考察を通じて、『壇経』の成書問題を偈頌の収録という点から再考察し、また『壇経』に見える心性論を比喻表現に着目して明らかにした。

②『壇経』に見える偈頌と散文との脈絡を分析してみると、偈頌と散文とが内容上の緊密な連絡を有している場合と、文脈上唐突に感ぜられる場合とがあった。後者についてはさらに、経典の形式を模倣するために説法のしめくりとして偈頌を置いた場合、おそらくは『壇経』以前から流布していた慧能作とされる偈頌を、『壇経』の文脈に合わせた無理な解釈をほどこして収録している場合とあることがわかった。

たとえば大梵寺説法の中に説かれる「滅罪頌」は、そこまでで説かれた善行の果報を求める行為の否定と「無相懺悔」「頓教」などの思想を概括し、さらに直後に展開される布施の功德をめぐる問答の前置きともなっている。

しかしながら、たとえば達摩以下六代祖師の「伝衣付法頌」は、もし前後の散文による解釈がなければ、衣の伝授について説いた偈頌と理解することはむずかしい。続く慧能自作の頌も、達摩頌の意を取ったと言いながら頌そのものの内容はまるで関係がないものである。

また、慧能の遺頌として「見真仏解脱頌」「自性真仏解脱頌」という酷似した題名の二首が収録され、しかも二首それぞれの前後に慧能の語る前置きと締めくくりの言葉は、二種ともほぼ同じで重複しており、きわめて不自然である。

こうした不自然さは、『壇経』の編集以前に慧能作とされる偈頌が多数存在しており、『壇経』の編集者ができるだけ取捨を加えずに網羅した結果とおもわれる。したがって、従来の校訂者のように現代人の感覚で重複や矛盾と思われる部分を衍文して削除することも、ことさらに意味の連関を見出そうとすることも、どちらも偏った見方であったことになる。

③『壇經』において神秀と慧能が五祖弘忍に提出した呈心偈では、「鏡」を智慧に、「鏡臺」を心に喩えている。神秀の偈においては、禪定によって臺のように安定した心にこそ智慧がはたらくことが歌われ、慧能の第一偈はそれを否定して、臺を持たない、つまり心に実体がないからこそ智慧が宿るのだと歌うようである。第二偈は、おそらく悟り、心、身体三者の関係があいまいな神秀偈に対して、臺のようなわが身に、悟りの心がそなわるという内容を厳密に言いなおしたのと思われる。

注意されるのは、荷沢神会の語録においては「鏡臺」の比喩は関心を払われず、鏡が心に、鏡がものを映すはたらきが智慧にたとえられているからである。おそらく、神会は本性と智慧を不即不離の体用関係として捉えているために、鏡そのものとその作用という比喩を採ったのであろうし、『壇經』では「無相」の宗旨を強調するために、いったん神秀の偈で「明鏡臺」を提出し、それを慧能が「無臺」として否定するというレトリックを採用したのであろう。

④『壇經』にはしばしば「心地」という語が見えるが、偈頌においては達摩以下の六代祖師が説いたとされる「伝衣付法頌」、およびそれに続いて説かれる慧能の頌が「心地」を比喩のかなめとしている。

これらの偈頌においては、心を大地に喩え、悟りを花や果実に、印可を与える師を雨に喩える。ただし「伝衣付法頌」の「心地」は「種」すなわち仏性を宿して必ず悟りを得ることが強調されるのに対し、慧能作の二首では「心地」の邪正によって生えて来る枝葉、すなわち行為の結果の邪正が決定するとされ、心の形象に少しくちがいがあ

る。重要なのは、心の不可思議な功德をうたうにせよ、心の両面性について警告するにせよ、どちらも得道における心の決定的な作用を説いていることである。『壇經』における「心地」は、見性の有無で一切が決定するという頓悟思想の表裏をよくあらわす比喩といえる。

⑤『壇經』では、「虚空」もしばしば心を喩える語として使用されており、先にみたように堅固な大地に喩える部分と矛盾するかにも見える。このことを『壇經』本文の文脈に即して検討してみると、「虚空」は実体を持たないからこそあらゆる現象を含有するという比喩であり、「心地」は善悪の概念から悟りにいたるまでの全てを産み出しうるという比喩である。

言い換えれば「心地」はあらゆる現象を産む因、「虚空」は自ら産み出した現象を保持する場であろう。そして『壇經』における「虚

空」のたとえば、心の非実体性を特に強調した「臺の無い鏡」の比喩と「心地」の比喩の中間にあつて橋渡しをする役目を担っているとおもわれる。

## (2) 真諦三蔵と禪宗について

①「法相宗の禪宗批判と真諦三蔵—敦煌文書スタイン二五四六『妙法蓮華經玄贊鈔(擬)』と『真諦沙門行記』」(船山徹編『真諦三蔵研究論集』京都大学人文科学研究所、2012、pp. 303-344)では、敦煌文書スタイン 2546『妙法蓮華經玄贊鈔(擬)』を詳細に読解し、法相宗において真諦三蔵が禪宗の批判者として形象されていたことを明らかにした。真諦三蔵は『曹溪大師別伝』においては、制旨寺における慧能の説法を予言した人物として描かれており、法相宗という対立宗派の言説を通して、禪文献における正統意識のありようについての多角的理解を得た。

②ジャイルズ目録は S. 2546 文書について、「不明の残巻」と「法相宗文献への注釈書残巻」の二部分から成るとしていたが、本論文はこれが慈恩寺窺基『妙法蓮華經玄贊』への複注であること、写本全体が一作品であることを解明し、『妙法蓮華經玄贊鈔』という擬題を提案した。

③その上で、引用典籍、禪宗の歴史と思想に関する記述、真諦の伝記や地理的事象への知識などから、『玄贊鈔』の成立年代と成立地を推測した。これらの検討を通して、本作品は10世紀の北方、おそらくは敦煌において、禪宗を厳しく批判する法相宗の徒によって制作されたと結論した。

④『玄贊鈔』の特徴は禪宗に対する激しい敵意である。本作品は禪宗を中観派と同様の空見の徒と断ずるほか、『真諦沙門行記』なる文献を引用して、真諦三蔵の来華目的を、菩提達摩が漢地で邪説を広めるのを阻止するためであったと主張する。

このことは、『壇經』と並ぶ慧能の代表的な伝記である『曹溪大師別伝』が、制旨寺における慧能の説法を真諦の予言に応ずるものとするのと著しい対象をなしている。同じ人物を用いて、禪宗は自派を権威づけ、法相宗は禪宗を批判したのである。

## (3) 夾山善会の法統意識について

①「仏法の埋没—夾山善会—の宗風と法統意識—」(『集刊東洋学』107号、2012、pp. 48-67)においては、唐代後期の禪僧である華亭徳誠、夾山善会、楽蒲元安師弟を取り上げ、禪宗史書『祖堂集』では三代の伝承が

いかに記録されたかを検討し、以下のことを明らかにした。

②『祖堂集』によれば、華亭以下三代の禪師たちが課題としたのは有無を超えた境地の体得とその言語表現であり、しかも悟りとその言語化の双方を成し遂げる弟子は少なく、つねに仏法の断絶が危機として意識されていた。かかる風潮のもと、言語の束縛への反省→無言の境地の体認→体験の新たな言語化というプロセスが理想の開悟とされ、祖師の開悟説話として結晶していたのである。

特に華亭章と夾山章を対照すれば、前者に見える夾山開悟の因縁が後者の伝える夾山自身の回想を元に再編集された記事であり、しかも問答の重点が開悟体験そのものから、その言語化へと変化していることが知られる。

③注意しなければならないのは、夾山一門はその華麗な偈頌によって後世に知られたのであり、『祖堂集』もすでに彼らの偈頌や修辞をこらした問答を多く収録していることである。彼らにおいては、偈頌作成の風潮こそが言語活動への反省を促進したと思われる。同じく偈頌の名手として知られる香巖智閑の開悟も、文字による自縄自縛から言語を超えた悟りの体験、そしてその体験を改めて偈として言語化するという構造を持っている。

④本論文であつかった開悟という本来個人的な体験に属する仏法をいかに伝承するかという問題は、『壇経』に説かれる頓悟説や南北宗の別、神会派の位置づけ、あるいは西天二十八祖説といった問題と関連しつつ、より深化した形での言説を検討したことになる。

また、『壇経』には神秀との偈の応酬に始まって数多くの偈頌が収録されるが、詩偈による仏法の伝達という夾山一門の宗風は、『壇経』以来の風潮が発展したものとも考えられるのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①齋藤智寛、仏法の埋没—夾山善会一門の宗風と法統意識—、集刊東洋学、査読有、107号、2012、pp.48-67

②齋藤智寛、法相宗の禪宗批判と真諦三蔵—敦煌文書スタイン二五四六『妙法蓮華経玄贊鈔(擬)』と『真諦沙門行記』、真諦三蔵研究論集、査読無、2012、pp.303-344

<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/156062/3/Paramartha.pdf>

③齋藤智寛、無臺明鏡照心地：《六祖壇経》的偈頌及其心性論、査読無、仏教文献与文学、2011、pp.60-91

[学会発表] (計3件)

①齋藤智寛「光孝寺、南華寺の慧能関係碑文と『六祖壇経』—空間化されるテキスト—」、第4回空間史学研究会、2011年12月1日(仙台市・東北大学)

②齋藤智寛「石頭一枝—夾山善会一門の思想と祖師の形象—」、第82回禅学研究会学術大会、2011年11月26日(京都市・花園大学)

③齋藤智寛「仮託於玄奘的偽経《大辯邪正経》初探：兼論其与禅宗思想的關係」、第四届玄奘国際学術研討会、2011年10月4日(中国偃師市・偃師賓館)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

齋藤 智寛 (SAITO TOMOHIRO)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：10400201

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：